

## 寺島和美作 ノンフィクション「むなしさからの脱出」

寺島和美(モノローグ) 今日はどこを読もうかな。久しぶりにヨハネの福音書でも…。あれ、このしおり、初めて教会に行った時の…。もう半年になるんだなあ。早かった…。それとも、長かったのかも…。

効果音 (ホームルームのガヤ)

先生 中間テストが終わったからって、遊んでたらダメだ。大学へ行きたかったら、もっと勉強しろ。女子校だと思って甘えるな。男子とのギャップを努力で埋めるんだ。クラブと両立しようなんて、もってのほかだ。とにかく、もっと勉強しろ。それだけだ。じゃあ、今日はこれで終わり。

一同 起立。礼！

和美 あ～あ。やっと高校に入って、…もう大学入試。なんのために生まれてきたのかね。本当に腹立つ。

女子 仕方ないよ。落ちこぼれ学校だもん。第1希望で入った人なんて、いないでしょ。みんな、ここしか来るところなくて、あきらめの境地で来たから。はかない夢を大学へはせるんじゃないのかね。

和美 むなしいね。

女子 とか言って、あんただって勉強かなりしてるんじゃないの？ イヤらしい。

和美 わたし、帰るよ。

女子 勉強しに？ バイバイ。

和美(モノローグ) 学校と言えと親に強制的に行かされてる塾の往復、これで3年間終わらせるのかな。あ～あ、去年のわたしは、高校に入れば何か見つけられるからって、自己を押し殺してきたのに、今、やっと高校生になって、なーに、この生活は？ 何かしなきゃ。わたしの、わたしの心の表現ができる何かを。

和美ナレーション いつもそう思うものの。学校の勉強に追われているわたしにとって、何かを見つけることは容易ではありませんでした。1学期も終わり、夏休みになり、もがきながらも、結局何も見つけることができずに2学期を迎え…。わたしは、心のはけ口もなく、夏休みに会った生き生きした友達と自分を比べて、あせりや劣等感すらも感じていました。わたしの目には、すべてのものが無意味に思っていたのです。そんなある日、わたしは思いもかけない人に会いました。

佐藤先生 寺島さん…？ そうでしょ？ 元気ですか？ 久しぶりですねえ。あなたが日曜学校をやめてから何年たちますか？

和美 あ、先生。ごぶさたしてます。今はもう高校生になりました。

先生 早いですねえ、月日がたつのは。わたしがあなたの分級(注:年齢別に分かれて、聖書を学ぶ教会の聖書クラス)を持った時は、小3でしたか。あなたは本当によく、休まずに来てましたものねえ。また来てみませんか？ 今はもう日曜学校ではなくて、高校生会なんていうものもあるんですよ。あなたの知ってらっしゃる先生も残っておられるし。

和美 はい。時間があつたら、そのうち。

先生 それじゃきつとね。待ってますよ。

和美 はい。さよなら。

和美(モノローグ) 教会か…。昔は無条件で行ってたっけな。それだけ純粋だったのかな。でも今は違う。人間

なんて、どうせもっとドロドロした醜い動物。教会なんかもう行けないわ。それより、わたしにはもったしなきゃならない大切なものがある。でもなんなんだろう？ 早く見つけなきゃ。

ナレーション わたしは、その時、まさか次の週から教会の門を毎週くぐることになるとは思ってもみませんでした。まさか次の週から教会の門を毎週くぐることになるとは思ってもみませんでした。次の週の日曜日の朝——。

和美(モノローグ) あ～あ、今何時かな。7時半か。(間) そうだ、昔は日曜日というと、早起きして教会へ行ったっけ。楽しかったな。み言葉を一つ覚えるとカードを1枚もらって、それが増えるのが楽しみで…。(間) よし、どうせ午前中だけだったら、いつもダラダラして終わらせるのだから、教会に行ってみようか。先生にも会いたいし…。

ナレーション こうして、わたしは本当に数年ぶりで教会に行ったのです。行ってはみたものの、牧師さんのメッセージも、お祈りも、別の世界の言葉のようにしか思えませんでした。そして、教会に来たことを後悔し始めたわたしの耳に飛び込んできた言葉は——。

牧師 …ヨハネの福音書の中に、こんな言葉があります。「私たちが神様を選んだのではありません。神様が私たちを選び、つまり私たちを必要とし、任命したのです。」

和美(モノローグ) え、「必要とした」？ 人間を？ なぜ神様が？ 神様は全能で、人間を見下げていないの？ その神様が、わたしたちを必要としてくださった…。ウソだ！ でもわたしは、今、教会の中にいる。だれに誘われて？ なぜ“教会に行こう”なんて思ったの？ 偶然？ でもそしたらすべてが偶然。わたしが生きてることも？ 違う！ やはり神様はおられるのだ。そしてわたしを必要としてくださったのだ。

ナレーション それから、わたしは教会へ通うようになりました。でも私の意識の奥にあったのは、“虚栄心”でした。わたしは、“神様に必要とされた”という意味を誤解していたのです。神様に選ばれたということを自負して、ほかの人とはわたしは違うのだという意識を持ち、知らず知らずのうちに、自分を高いところに置いてしまったのです。

そんな時、わたしの教会で特別伝道集会がありました。その前日、わたしは先生方と特伝のビラを配りに出かけていきました。

効果音 (街の雑踏)

先生 この辺で始めましょうか。今日、教会で集会がありますので、よろしかったら。

通行人 (口々に)「今、忙しいからねえ。」「あまり興味がないし。」etc.

ナレーション ビラ配りとは、わたしが思っているほど容易なものではありませんでした。勇気を出してかけた言葉も無視されたり、「関係ない」と断られたり、時には白い目や軽べつの笑いさえ聞こえました。教会の帰り道、わたしは悲しさと共になんとも言えぬ憤りを感じました。

和美(モノローグ) なぜ分かってくれないのだろう。神様って、本当にすばらしい方なのに。なぜ人は神様を知ろうともしないのだろう。なぜ、あんなかたくなな心を持つてしまうのだろう。

ナレーション その時、わたしは、本当に人間の心の壁の厚さを感じていました。けれども、その時の私は、自分自身の“心の壁”—神様を素直に受け入れることのできない自らの姿には、気づくことができませんでした。

その夜、妹と台所にいて——。

効果音 (キッチン)

和美の妹 あ！（皿の割れる音）あ～あ、またやっちゃった。

和美 全く。もっと落ち着いてすればいいのに。

妹 何言ってるの。お姉さんだって、わたしと大して変わってない。

和美 そんなことないよ。わたしはもう少しマシよ。もっと落ち着いてるし、皿なんか割らないわ。

妹 自意識過剰ね。今日、定規忘れてったのだけ？ 朝寝坊して、慌てて…。

和美 はん。八つ当たりだね。(間)(モノローグ)“自意識過剰”か…。そう言われてみれば、少しはあるのかな。え、それじゃあ、もしかしたら、今日ビラを配ってるわたしに対して白い目を向けた人たち。「教会や神なんか関係ない」と言った人たち。わたしも彼らと同じなの?! ううん、そんなことない。わたしは、わたしは違う! でも、じゃなぜ教会に行っていないながら、「神様を受け入れる」と言い切れないの? 心のどこかで、教会に来ている人を笑っているから…? わたしも、彼らとちっとも違ってない。信じてるような顔をして教会へ行ってたって、心の中では、まるで神様を受け入れてないんだもの。でも、どうすればいいの? 心の壁をなくして、素直に神様を受け入れるには、どうしたらいいの?(エコー)

ナレーション わたしは、その夜、たった一人で祈りました。それは、わたしが始めて神様に向けた、心の底からの叫びでした。

和美 (祈り)神様、どうか、わたしの醜い心の壁を破ってください。そして、わたしがあなたを本当に心から信じ、受け入れることができますように。

ナレーション 次の日の特伝のメッセージの間、わたしは、一言も聞き洩らさないようにしていました。キリストの十字架の愛を前にして、なおもためらい迷っているわたしの耳に、最後に次の言葉が突き刺すように響いてきました。

説教者 神様は、わたしたちを愛して、イエス様をお送りになりました。わたしたちは人間です。そして人間には、虚栄心や見えがあります。人を見下し、己を高めようとする罪があります。けれども、そんな人間だから、神様はわたしたちを愛してくださったのです。罪びとだからこそ、愛してくださったのです。この神様の愛を知ったとき、わたしたちも神様を心から愛せるようになるのです。

和美(モノローグ) わたしたちが神様を愛する。このわたしにも、神様を愛せる? そしてすべてを神様にお任せして、生きていけたら…。ううん、生きていける。神様が愛してくださったわたしだから…。

説教者 「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としてのみ子を遣わされました。ここに愛がある。」ここに愛がある。この神様の愛を無条件に受け入れたときに、あなたは救われます。あなたのうちに、神様の新しい愛の命が始まるのです。

ナレーション その時、わたしは、あの言葉、「神様がわたしを必要としてくださった」ということの本当の意味が分かったのです。この愛の中におらせるために、神様はこんな罪びとのわたしを選ばれ、求められたのです。わたしは、その時、十字架の上から両手を広げて招いておられるイエス様のもとに、ためらうことなく飛び込んでいったのでした――。

<完>